

タイトル	札幌の偉人・上島正：武士の身を捨て単独で北海道開拓に挑戦し一代を築いた企業
著者	黒田，重雄；Kuroda, Shigeo
引用	北海学園大学経営論集，9(2)：77-95
発行日	2011-09-25

札幌の偉人・上島 正

—— 武士の身を捨て単独で北海道開拓に挑戦し一代を築いた企業人 ——

黒 田 重 雄

目 次

はじめに

1. 生まれてから 17 歳で江戸に出るまで

- (1) どこ生まれか。どこの藩に所属していたのか。
 - (2) どういう教育を受けたのか（書画を学んでいたのはなぜか）。
- #### 2. 江戸に出てから札幌に来るまで——何をしてきたか——
- (3) 江戸の逗留先から半年でなぜ町屋に奉公に出たのか
 - (4) なぜ行商人になったのか、何を取り扱っていたのか。
 - (5) 測量士になったのはなぜか。

3. 札幌に来てから——どのようなことを成したのか——

- 〈1〉札幌において単独で米作りに成功したこと。
- 〈2〉上島の故郷（信州信濃の上諏訪）から大勢の人々を札幌圏へ連れてきたこと。
- (6) なぜ札幌に来ることになったのか
- (7) 最初に米作りをやろうとしたのはなぜか。
- (8) なぜ上諏訪から大勢の人々を連れてきたのか
- (9) 札幌で成した顕著な業績は何であったか。
- (10) 自己の人生の総括はどうか。

おわりに

は じ め に

上島正——札幌の歴史を築いた一人の先人

小論は、札幌の歴史を築いたとされる、あ

る一人の人物の足跡を考察したものである。

その人の名は上島 正（かみじま ただし、以下上島）という。上島という人物は、札幌歴史資料館の「札幌の歴史を築いた先人達」として黒田清隆や新渡戸稲造などと一緒に名前の挙がっている 46 名中の一人である¹⁾。

その解説をみると、上島が精魂込めた努力により完成した花畑「東臯園」や信濃國一の宮諏訪大社の分霊を奉祭した札幌諏訪神社を最初に建立した人となっている。

果たしてそれだけだろうか、と調べていくうち、上島については、筆者は、札幌地域の開拓と産業発展に大なる功績を残した人物であるという結論に達するようになっている。

実際、厚別中央歴史の会（札幌市厚別区の任意団体）は、明治 16 年厚別中央の開拓に最初に入った 8 名を調べていくうち、この上島という人物がいたからこそ、厚別中央の入植が開始されたのだということを明らかにしている。もとより、この地域のみならず、札幌ないしその周辺の開拓と産業化の進展にも大いに関係していることも分かってきている。

最終的に、筆者としては、上島の業績は以下の二つであったのではないかと考えている。

〈1〉札幌において単独で米作りに成功したこと。

〈2〉上島の故郷（信州信濃の上諏訪）から大勢の人々を札幌圏へ連れてきたこと。

では、なぜそういうことになったのか。江

戸時代には譜代藩の重臣の嫡子であった上島の身に何が起ったのか。

日本近代史の代表的研究者である遠山茂樹の著書『明治維新』の最後に、

歴史的画期としての明治維新は、天保12（1841）年の幕政改革に始まり、明治10（1877）年の西南の役をもって終る、37年間の絶対主義形成の過程であると考え、ここに明治維新史の筆を擱く。（了）

と結んでいる³⁾。

この遠山の明治維新の期間（37年間）と上島が生まれてから札幌へ来るまでの過程（40年間）を比較してみる。

奇しくも遠山茂樹の明治維新の期間と上島が札幌へ来るまでの期間が一致している。

因みに、絶対主義の完成物と見られる明治憲法（大日本帝國憲法）は、1889年（明治22年）2月に発布、1890年（明治23年）11月に施行されている。

つまり、遠山によると、明治維新とは、幕末期から明治憲法が施行されるまでの大混乱期なのである。

人々にすれば、300年の眠りから目を覚まし、今までとは打って変わった状況に置かれ

て、何の補償もなく、どうしていいかわからない、しかしまた、自分で何かをしなければ生きていけないと右往左往していた時期だということになる。

青年・上島もまさしくその渦中にいた。彼はどうしていたのか、またどうしたのか。結局、どうして札幌で開拓することになったのか。

高島藩（現・長野県諏訪市）といえは、幕末期藩主が幕閣老中にまでなった藩であり、上島はその藩の重臣の嫡子である。このことから、上島が明治維新という激動の時代に翻弄されながら、またそこを生き抜いて札幌へやってきたことは間違いのないのである。

また、そこを生き抜いてきた経験が札幌の開拓に生かしたということもできる。そうした経験があったればこそ札幌での開拓に従事できたし、札幌でもいろいろな事業に顕著なことができたとも考えられる。上島の連れてきた人たちによって、札幌の各地域（例えば、厚別中央地区）の開拓も始まったようにである。

旧藩の重臣の嫡男として生まれた男が、後に検討されるような、何故若くして武士を捨て、町屋に奉公し、行商人になったり、測量士になったりして、最終的に札幌に開拓者として入植することになったのか。そして、こ

明治維新（期間 37 年間）	上島 正（札幌へ来るまで 40 年間）
天保 12 年（1841） 幕政改革（水野忠邦） ↓ べり一來航（1853） 安政の大獄（1858） ↓ 王政復古（慶応 3 年（明治元年）） （37 年間） 版籍奉還（明治 2 年） 廃藩置県（明治 4 年） ↓ 明治 10 年（1877） 西南の役	天保 9 年（1838） 高島藩の重臣の嫡男として生まれる ↓ 安政 2 年（1855）上島、江戸へ （直ちに町屋へ奉公にでる） 慶応元年（1865）行商人になる ↓ （40 年間） ↓ （高島藩廃藩） 明治 7 年（1874） 測量士になる（37 歳） ↓ 明治 10 年（1877） 上島、札幌へ（40 歳）

の地で「札幌の歴史を築いた先人達」の一員と成りえたのか。

小論は、「札幌の歴史を築いた先人達」の一員である上島という人物の意外とも見える遍歴の過程をいささかでも解明したいとの意図を持って書かれたものである。

上島は自伝を残している

上島という人物を浮き彫りにするに際しては、大きく3つに区切って考察する事が可能である。

1. 生誕から17歳で江戸に出るまで——どういう教育を受けていたか——
2. 江戸に出てから札幌に来るまで——何をしていたか——
3. 札幌に来てから——どのようなことを成したのか——

上島は、自伝ともいべき書き物『想い出の記』(日記仕立ての読み物)を残している⁴⁾。

それを参照しつつ、上島という人物の生まれ、育ち、札幌に来るに至った事由などを検討してみたい。

実は、上島の日記を検討すると、いくつかの「なぞ」と「なぜ」が出てくる。

それらを列記すると、

- (1) どの生まれか。どのような藩に所属していたのか。
- (2) どういう教育を受けたのか(書画を学んでいたのはなぜか)。
- (3) 江戸の逗留先から半年でなぜ町屋に奉公に出たのか。
- (4) なぜ行商人になったのか、何を取り扱っていたのか。
- (5) 測量士になったのはなぜか。
- (6) なぜ札幌に来ることになったのか。
- (7) 最初に米作りをやろうとしたのはなぜか。
- (8) なぜ上諏訪から大勢の人々を連れてきたのか。

(9) 札幌で成した顕著な業績は何であったか。

(10) 自己の人生の総括はどうか。

先の3つの区分に、上島の日記における「なぞ」と「なぜ」を挿入して、冒頭の「目次」ができあがっている。

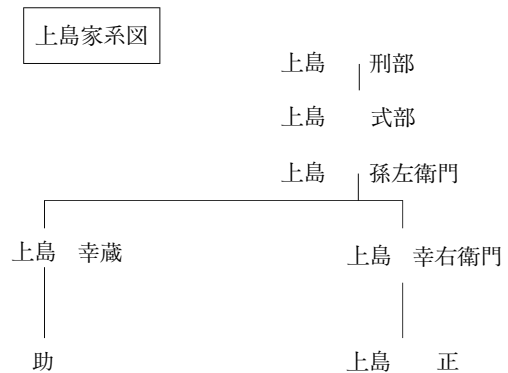
1. 生まれてから17歳で江戸に出るまで

(1) どの生まれか。どの藩に所属していたのか。

上島は、天保9年(1838)5月15日、長野県諏訪郡上諏訪村に生れている。

上島の日記によると、上島家は古くは信濃国上伊那を領する上島城主であったが、落城の後(いつかは不明)、諏訪家に随身し、家老主座となり、その子孫である上島刑部以降は代々普請奉行を勤めるとともに諏訪郡湖南村南真志野に住まうことになったようである。

上島の父幸右衛門も当時そのような身分であったと考えられる。上島は幼名が源吉で家督相続の折り、名前を正に改めたとある。



中澤豊氏(厚別中央歴史の会会員)作成)

上島は、南画をよくし、札幌に来てからも相当数の画を描き残している。北海道開拓記念館に数多くの画が所蔵されている。北海道の開拓時代をよくあらわすものとして引用さ



れることが多い。

下図は、そのうちの一枚で、「上島城」を描いたものとなっている。

この描かれた図より、北伊那郡小野村の近くであろうと、辰野町役場を訪ねると、教育委員会教育次長・向山 光氏は、この辺りにあったであろうと地図上で指さすが、不明確であるとの返事であった。

また、上島は、湖南村南真志野の全景を描いている。当時は、山裾では桑畑が多く見られ、平地は水田であった。現在の諏訪市湖南（湖南村）も山と水田に囲まれた狭い地域であるなど、150年前とほとんど変わらない風景である。

天正10年（1582年）に武田氏が滅び、本能寺の変があって、信長が倒れると、諏訪頼忠が、諏訪に復帰する。

慶長6年（1601年）諏訪頼水が高島藩初代藩主となる。高島藩の藩格（地位）は譜代である。明治元年には、諏訪忠礼（ただあや）が第10代高島藩主となって、最終的に彼が約270年続いた高島藩を閉じている⁵⁾。

(2) どういう教育を受けたのか（書画を学んでいたのはなぜか）。

上島は、日記に、

幼少より画が好きで、15、6歳のころには友艸（そう）軒湖山とか虚舟とか号していたし、狂歌などを詠むときは花園の鋏持と称していた。書画は9歳から17歳まで生之堂鏡湖先生に就いて学んだ

とある。

なぜ画を学ぶことになったのか。高島藩主の文芸（教養）に対する造詣の深さにあった。

諏訪市・諏訪市教育委員会編（1985）『第21回諏訪市文化祭・諏訪藩主展』によると⁵⁾、3代藩主忠晴（ただはる）（明暦3年（1657年）封す）の項で、

忠恒（ただつね）の長子で母は永高院小喜多民といひ京都の公卿の出である。高島藩政は初代二代の間にほとんどその基礎をかためた。新田も大部分できあがっていた。

いろいろの事例もととのった。三代忠晴としてはそれを整備すればよかった。寛文の法度はじめ慣例を明文化した法令をたくさん出した。宗門改・鉄砲改をはじめ、藩政の第一次改革ともいふべき地方知行の召しあげも円滑にすんで封建制は完成し、藩政には何の心配もないまでになり、3代目になってはじめて藩主が文芸に遊ぶ余裕ができた。忠晴は画才文才にめぐまれていた。画は水島卜也等狩野派の人に学び、西王母・孔子など人物画をよくした。

漢文では紀廟の記や灘波紀行などが知られ、修史を志しては本朝武林小伝七巻、続本朝武林小伝三五巻をつくり、下諏訪に逍遙亭を営み、詩人集めてその詠を編したりもした。大納戸日帳は忠晴がはじめて藩主の身边を記録させたもので、それによると能楽にも興味をもち、みずからもシテをつとめるほどの上達で、あわせて御預人忠輝のなぐさめにもしたようである。

3代目はその家の運命をきめるといわれるが、忠晴は、諏訪家の基礎をかため、みずからは好む道に遊ぶことができ、理想的な藩主であった。千野家老家の記録に、

乾隆院尊候御功業の儀は筆紙につくし難く、
大家の御廟にして百載まつるべき君なり。

とあるように、よく三代としての責任を完うした藩主であった。

将軍の命により奥州平藩主内藤帯刀の女をめとり、これは諏訪家に俳趣味を移植する機縁になった。

また、4代藩主忠虎(ただとら)(元禄8年(1695年)封ず)については、彼の個人的な趣味は、俳諧であり、父の劣らぬ好学の藩主であり、深く学芸を愛し、誌・歌・画などを学び、特に俳諧は闇幽と号してその道も上手であったとしている。特に、母方の伯父平藩主内藤長概(風湖)が談林俳諧の長老であり、忠虎は江戸六本木にあったその家に入り、のちには芭蕉の門人服部嵐雪や榎本其角等について正風を学んだことが紹介されている。(この時期上諏訪に芭蕉の弟子曾良が出ている)⁶⁾。

5代藩主忠林(ただとき)(享保16年(1731)封ず)も、学問にはきわめて熱心で、荻生徂徠の流れをくみ、服部南郭について詩文を学び、江戸邸には清風楼、諏訪には八詠楼をつくり誌友を招くなどして、詩文の作は

すこぶる多かった。

画も山水といい人物といい結構であり、趣味の大変に広い藩主で、これが藩士に影響し、一般の趣味を高める結果ともなった。

6代藩主忠厚(ただあつ)では、貨幣経済が進むにつれて、藩財政は困難となって、お家騒動まで起こっているが、7代藩主忠肅(ただかた)は俳名を「月閑亭」、8代藩主忠恕(ただみち)は俳号を「射山」と号していた。

藩主がこうであったから、藩士たちも文芸を嗜むようになったのではないか。彼らの子弟もそのような素養を積むことが求められたに相違ない。上島もその流れで書画を学んでいたと考えられる。

これまでも信州信濃あたり一帯が教育熱心な地域ということで有名であるが、こういうところに源を求めることができるように思われる。

2. 江戸に出てから札幌に来るまで——何をしていたか——

(3) 江戸の逗留先から半年でなぜ町屋に奉公に出たのか

高島藩の実情について

日記には、父の命により17歳で江戸へ出て、森備中守屋敷富木衛門七方へ逗留する。半年ぐらい経って急に武士がいやなりそこを飛び出し、丸腰になって町屋に10年間奉公した、とある。

上島が江戸へ出る前後の状況を考えてみる。

上島の江戸へ出た年は、安政2年(1855)であった。世の中は騒然としていたが、高島藩としては政治の前面にでていたころである。

9代藩主の忠誠(ただまさ)が、幕閣の若年寄、老中にまでなったときと軌を一にしていたからである。

このころ、高島藩の石高は、3万石(文久

3年（1863）、幕府大目付調べ）の小藩であった⁷⁾。江戸の藩の石高ランキングでは、185藩中、外様大名前田利家の金沢藩の120万石を筆頭に、譜代大名諏訪頼忠（3万石）は125位であった。

小藩主でも老中にまで上り詰めるというのが混乱期の象徴といえるかもしれない。

先に引用した、諏訪市・諏訪市教育委員会編の『第21回諏訪市文化祭・諏訪藩主展』には以下のように書かれている。

9代藩主忠誠（ただまき）（1821-1898）は、8代藩主忠恕（ただみち）の長子、母は松平定信の女清昌院で、江戸木挽町の藩邸に生まれている。

天保11年（1840）20歳で藩主になり、万延元年（1860）40歳で若年寄に、元治元年（1864）44歳で老中にあげられ、外国御用を兼ね、浦賀で、また江戸の自邸で外国人と接渉するなど大いに働いたが、長州征伐のことで閣僚と議が合わず退官した（長州征伐には反対していたらしい）。

高島藩主が幕府の主要な地位についたことは空前のことであって、忠誠の人物のすぐれていた証左であるが、この就任が維新に当たって高島藩の立場をひどく難しいものにした。

すなわち、官軍からは佐幕派の頭目とにらまれ、またにらまれていると思い込み、一万石減封のうわさを信じて京都に特使を出して阻止の運動をしたり、社稷のために薩長の鼻息をうかがうにそがしく、そのために神宮寺の諸建築や天守閣など大切な文化財を必要以上に失った観が深い。

この間に文久元年（1861）11月には和宮の降嫁、中山道御通りの警衛に当たったり、元治元年（1864）11月には水戸浪士と和田嶺に戦ったりもした。忠誠は48歳（1868年）で隠居した。

10代藩主忠礼（ただあや）は、慶応4年（1868）本家養子となり、15歳で封をついだ。徳川慶喜が大政を奉還し、新政府から大政復古の論告が発せられた直後であり、時局の複雑に動くときであった。

忠誠が早々に隠居したのは、彼が佐幕派と見られて風当たりが強かったためと思われるが、忠礼が弱年のため後見役をつとめたので、忠誠の政治といってもよい。

忠礼は版籍奉還後、藩知事、県知事とうつり、華族に列せられ子爵を授かり、のち指令によって、明治4年彼が東京に移って、270年続いた高島藩は廃藩となった。

しかし、徳川家康が天下をとってから、譜代の高島藩も全体として安穏な日々を送っていたといえる（ただ、6代藩主忠厚（ただあつ）（宝暦13年（1763年）に藩主となる）のとき、貨幣経済が進むにつれて、藩財政が困難となったことがあり、お家騒動に発展しているが表沙汰にはならなかったことがある）。

上島が生まれた天保期には、世の中、不穏な空気が漂っていた。遠山の『明治維新』には詳しい年表が載せられている⁸⁾。

天保元年 水戸藩（徳川斉昭）・薩州藩（調所広郷）、藩政改革に着手にはじまり、諸国飢饉、一揆・うちこわし激化。大飢饉、百姓一揆激化、郡内騒動起る。大塩平八郎の乱。生田万の乱。渡辺崋山・高野長英捕縛る（蕃社の獄）。

全国的にも、江戸末期・天保、弘化、嘉永、安政年間は大変な時期に当たっている。不況と開国問題でおおわらわの時代であった。

天保12年、幕政改革（水野忠邦の天保の改革）はじまる。異国船打払令を停止。江戸・大坂上知令撤回。

借金で首の回らなくなった旗本など武士を救うため幕府は次々と借金帳消しの改革政策を打ち出したため、特に、それまで隆盛を誇ってきた札差も壊滅的な打撃を受けた。

「蔵前の旦那衆が、たった一日で没落した」という噂が江戸中を駆け巡ったり、あれほど貴重だった札差株は、大暴落して買い手がつかなくなったりしている。

弘化元年 オランダ国王、幕府に開国を勧む。
アメリカ・イギリス船来航。幕府、老中水野忠邦を罰す。米使ビッドル来航、国交を求む。朝廷、海防勅諭を出す。朝廷七社七寺に勅して外患を祈攘す。

オランダ東印度総督、幕府に開国を勧告。安政元年(1854)ペリー来航。日米和親条約(神奈川条約)締結。

江戸へ出た理由について

安政2年(1855)は、上島が江戸へ出た年である。そのころ、幕府側(佐幕派)と勤王攘夷派(勤攘派、倒幕派)に分かれて血で血を洗う抗争になっていた。小藩ではあるが譜代の高島藩でもどちらに与するかで論争が行われていたに違いない。9代藩主が幕閣に入ったが、結果的に何の良い効果をもたさなかったということもあり、最終的には尊攘派につくことに決していたようである。

その証拠に、明治になってから、高島藩では、いち早く上洛して勤王の志をあらわし、版籍奉還聴許(版籍奉還を願い出る)し、結果、諏訪忠礼は明治4年高島藩知事に任命され、士族にまで列せられている。

上島家は、270年間という長い間高島藩に仕えてきた家柄である。幕府とは一蓮托生の関係である。3万石の高島藩も幕末期には藩財政は逼迫し、藩政改革と緊縮財政が行われていたことは疑う余地がない。上島家の俸禄も減少していったに違いない。こんなことをしていたら、やがて藩も危ういという気運が高まっていったのではないか。忠誠が幕府の中枢に入ってもまったく効果がなかったということもある。

上島の父幸右衛門も重臣の身、こうした高島藩の動向は掴んでおり、いずれは藩も危ないと察知していたと考えてもあながち間違いとは言えないであろう。

いずれにしても、父は、文芸に精を出していた上島に江戸の様子を自分の目で見てくるように命じ、場合によっては、その後の生き方、身の処し方を自分で考えるように諭したかもしれない。

江戸には高島藩の藩邸があったと思われるが、そこには知られたくないと、幸右衛門はひそかにその旨を江戸の知人に書状をしたため上島のことを頼んだのではないか。

結果、江戸へ出た上島が見たものは、不穏な空気の世情であり、最たるものは佐幕派と倒幕派とが血で血を洗う状況であった。

「天保の改革」では武士の借金を帳消しにするという乱暴なものであった。幕府や武士の権威はつぶれていた。

こうした中で、高島藩の重職である奉行の嫡男が、その身分を江戸で明らかにすることはかえって身を危うくすると覚ったはずである。逗留先の森備中守屋敷富木衛門七方へも迷惑が掛かかる状況となっていたのかも知れない。

時の権威に対する上島の反発も大きく、半年間、国元と頻繁にやりとりしていたが、結局、武家を捨てる方を選択した。上島は町家に奉公することは、国元の指金(さしがね)であった可能性もある(一悶着あったとは書かれていないので)。

ただ、その後店を出すことには反対されている。国元の資金不足があったのかもしれない。

真相がどうあれ、上島は、幕末期の混乱の中で、権威を失った武士に見切りをつけたというのがもっとも説得力のある説である。本当のところはどうか。見切りをつけねばならなかった状況であったということではないか。

先がどうなるかも誰も分からない。国元へ

帰っても心許ない。こうしたとき、武士でなければ何でもよいと考える。自分で働き生活していけることは何か。町人になるしかなかった。それは父幸右衛門も納得しなかったのだから。

つまり、これから一体何をして食べていけばよいか、と考えたとき町人だったということではないかと筆者は考えている。

町屋への奉公について

堅実に自分の手で稼ぐことを考えた上島は、まず、町屋へ奉公に出た。どういう商品を取り扱う店であったのだろうか。実際に何を取り扱っていたか定かではない。借金を帳消しにされかねない札差ではなかったことは確かだろう。

当時、上諏訪の平民の次、三男は、江戸（東京）へ出て、海に縁のない国・養蚕国の出身なのに「海苔商人」とか「米商人」になっていることが多かった。それらを頼ったか。上諏訪では、武家の出であることからそれは避けたであろう。繊維・呉服、家具・調度等の店ではなかったか（これは、後に行商人になることと関係していると思われる）。上島は、10年間奉公している。

一方で、当時、武士が町人になったのは珍しいことではなかった。

明治・大正期の日本画壇の大家で随筆も書く鏑木清方は、「幕末を廃顔（はいたい）期のどん底のようにいう人がある」が自分も同意すると書きはじめた上で、こんな時代、武士も手をこまねいては食べていけないと、いろいろな職に手を出していたと書いている⁹⁾¹⁰⁾。

明治の初年といえば、ながいあいだ大江戸に覇を唱えた徳川幕府が瓦解して、御譜代といわれた家がらでも、大津浪のように押し寄せた御維新の世替り代がわりには、ただ手を拱（こまね）いて何ごともしない御時世と諦めるより他はなかった。

士族の商法という諺が生まれて今はそれもまたこと古（ふ）りた昔の諺となったが、旗本の殿様が鰻（うなぎ）を割いたり、汁粉屋をはじめて、給仕する文金高島田のお嬢様が、これこれ町人と呼ぶおかしみの「士族のしるこや」は、三遊亭遊三というはなし家のおはこだった。

(4) なぜ行商人になったのか、何を取り扱っていたのか。

上島の日記には、

町家に十年の間奉公致しました。基後、江戸に来て商店を開く積りを立てましたが、父が許して呉れないために江戸・大阪の間に行商をやって居りました。私は道を歩くことが達者で、実の所その時分には一日に三十里（120 km）くらい歩きました。

とある。

なぜ行商人になったのか。どんな物資を取り扱っていたのか。文献資料などから筆者の類推は、以下のようなものである。

当時の江戸・大坂間の物資は、船で運ばれていた。しかし、難破することが多く貴重品を無にすることも多かった。このため、陸上を使う伝馬・継飛脚が発達していた¹¹⁾。

そこで、筆者としては、上島は、絹織物や生糸そして小間物や家具調度品などの高級品やその原材料を取り扱う、伝馬・継飛脚のような仕事（運び屋：相当な収入・収益になる商売）をしていたのではないかと考えている。

(5) 測量士になったのはなぜか。

東海道（江戸—大阪）の距離は、日本橋～大阪：546.3 km とある¹²⁾。途中に、上諏訪がある。上島は一日 120 km 歩いたというから、4.5 日で歩いた計算とになる。

しかし、次第に同業者も増え、利益も薄くなってきている。

江戸・大阪の間に行商をやって居りました。私は道を歩くことが達者で、実の所その時分には一日に三十里(120 km)くらい歩きました。世の開けるに随って利益が少なくなりましたので国に帰り農・商の両業を営む傍ら庭作りなどして楽しく月日を送って居りました。

そうばかりもしておれないので何かよい職はないかと思案していたところ、明治6年、「地租改正」があったので、早速東京へ出て測量士になる¹³⁾。

3. 札幌に来てから ― どのようなことを成したのか ―

本小論の「はじめに」に記したことであるが、筆者としては、上島の業績は、以下の二つであった、としている。すなわち、
〈1〉札幌において単独で米作りに成功したこと。

〈2〉上島の故郷(信州信濃の上諏訪)から大勢の人々を札幌圏へ連れてきたこと。

これらについての検討である。

(6) なぜ札幌に来ることになったのか 上島の日記には、

明治7年に地租改正の時に測量官になりまして東京近傍は悉く測量しました。この時分でございましたが、札幌に居た者で私の門人になったのが一人ございました。これは苦小牧・札幌間の道路の出来た時分に使われていた者で、北海道の事情は一通り通じて居り、この者から毎度、北海道の様子を聴き面白く感じて居りましたが、つまりこれが当地に来る基になったのです。自分は相州(相模の国)秩父山から小田原附近を測量して明治10年1月に一旦帰国し(湖南村へ)、測量を断って当地に来る様になりましたが、色々な話がございます。

測量士になったこと、そして各地を測量し

て歩くことが、札幌に来ることと札幌に来てから大いに役立つこととなる。

当時の札幌はどうだったのか

以下の説明が参考となる¹⁴⁾。

当時の日本は明治維新による混乱期で、官軍(朝廷側)でなかった藩はとりつぶされ、禄(「ろく」藩主から与えられていた土地やこめなどの武士の収入)を失った士族(武士)や貧しい農民達が社会不安のもとになっていました。そこで、明治政府は北方の防備と開拓という2つの使命を担った「屯田兵」(とんでんへい)を北海道に植民させることになりました。

・・・・・・・・・・・・・・・・

この考えは、明治政府にとっても一石二鳥のアイデアだったに違いありません。政府はさっそく屯田兵のきまりごとをつくり、明治7年には札幌郡琴似村に屯田兵の家200戸の建設を開始しました。翌年の明治8年には、198戸、965人が移住し、屯田兵村ができていったのでした。

一方、石狩平野は日本海岸式気候に属するため冬季の積雪量が多く、亜熱帯の植物である「稲」の栽培にはとても向かない土地と見られていた。

明治初期に開拓アドバイザーとして雇われたホーレス・ケプロンが農業に関するさまざまな意見具申をしているが、寒冷な風土を理由に、米の生産はネガティブとしていた。

そのため、開拓使は、屯田兵などに対し、稲作の試みそのものを禁じている¹⁵⁾。

屯田兵には米を支給していた。屯田兵が耕作していたものは、ひえ・粟・そば・麦・南瓜・唐きびなど、寒い土地でも育つ穀物であった。米作の禁を破ると罰則も設けられていた。

(7) 最初に米作りをやろうとしたのはなぜか。

上島の業績の一つとして筆者のあげる、

「〈1〉札幌において単独で米作りに成功したこと」というのは、やや、おかしな響きを持つ解釈であるかもしれない。

しかし、このことは例えば、厚別の地に入植した人々が、なぜ、いきなり米作りをしたのか。することができたのか、ということと大いに関係している。米作りこそ、上島のアドバイスのお陰であるといっても過言ではないのである。

上島が、札幌にやって来た早々、札幌も人口が増え、米の値段も高騰してきていた状況を見たとき、屯田兵の作れない稲作をしてみようと考えたのは先見の明があったとしか言いようがない。

しかし、いきなり成功したわけではないかもしれない。

北海道全体としては古くから、稲作の跡が数多く残されているという。

しかし、石狩地域における最初の米作りの成功者は、中山久蔵という人物だとされている。明治6年のことである。中山は、「寒冷地稲作の父」といわれている¹⁶⁾。

上島も中山の話は聞いていたかも知れないし、実際にそこを視察していたかも知れない。

明治7年に「地租改正」があり、37歳で測量官になって3年間勤めている。(37歳～40歳、(1874～1877))。

この時期に、測量の弟子に北海道の話聞き興味を抱く。

40歳になった(明治10年1月)ときに、一旦、上諏訪へ帰国、その後、単身で東京を経て横浜港出航、陸前の萩の浜へ、暖かくなるまで気仙沼に逗留し、その後青森などに寄り道をしながら、函館、小樽を経て(明治10年5月18日に)札幌にやってきた(上諏訪から四か月ほど掛かっている)。

小樽では、以前測量をしていたとき親しくしていたものより小樽の星川竜蔵という人への紹介状をもらっていたので、そこへ20日ばかり逗留している。その後札幌では浦河通

り(東二丁目)の高橋亀次郎方に下宿している。そこで、20日間ほど近隣の実地調査を行う。

西は銭函、南は山鼻、東はいざり(恵庭市内の地名)、北は篠路辺まで地質や地形を探查検討している。なかなか適当なところが見付からなかったが、いろいろするうち上島は現在の場所を見出している。

ここは、前年できた農作地であったが、五月以来ただ滞在してだけなのも馬鹿らしいので、水田の出来そうなところを見付けて稲を植えてはどうだろうか考える。

「いざり」を探查したときに、中山久蔵の水田を見ていたのではないか。

札幌にも人口が増え、米の値段も高騰してきていたので、屯田兵の作れない稲作をしてみようと決心したとしてもおかしいことではない。

日記にも、

江戸・大阪の間に行商をやって居りました。私は道を歩くことが達者で、実の所その時分には一日に三十里(120km)くらい歩きました。世の開けるに随って利益が少くなりましたので、国に帰り農・商の両業を営む傍ら庭作りなどして楽しく月日を送って居りました。

つまり、行商人をしていた頃、農のうち園芸はもとより、水田も手がけていたか、もしくは、稲作についての知識や研究をしていたかもしれない。

決心したあとの動きは早い。まず、土地を確保しなければならない。当時の開拓大書記官の調所廣丈まで願書を出したが却下されている。しかし、どうしても残念なので、また願書を書いて直接調所宅まで押しかけて許可してもらおうとする。

調所は、それは繁松某が却下したものであるから、そちらへ行くがよからうという。

(その後、繁松某のところへ行って交渉す

るのであるが、この辺り、日記は最も面白く書かれている。) (日記の日付け、明治三十三年十月二十三日、明治三十三年十月二十四日)

少し長いが引用してみよう。

繁松は大立腹の模様で、まだ、札幌の様子も分らぬ癖に山師めいた事を企てるから困る。当地にて、佐様な術を使用するくらいで米が出来るなら、それ以上結構なことはないが、無益だから止して仕舞へ、とのことに、私は押し返して当地の水田は向水もあびる田なれば米作に適せず、私の見込み通りにすればきっと稲が出来ます、と云うに、繁松はますます立腹して、官には専門の役人をつけて年々試作をやっているが、それでも米らしきものはとれない。以来佐様な事を聞く耳は持たぬから早く立去れよ、と大音に叱りました。然らば自費で試作をやってみますから苗の御分与が願いたい、と申しますと今度は烈火の如く怒って山師と話は致さぬ。早く立去れ立去れ、今後この所え足を踏み込むことは相成らぬ、と畳蹴立てて内に入りました。で、何とかして水田がやって見たいと、今度は高橋亀次郎氏に相談致しました所、繁松の様ではない。少しは話が面白い。

高橋氏は繁松と違って大いに話の調子が合う。自分が稲田試作の事を語(かた)りしに、私も月寒にある所有地に稲の試作がして見たいと思っている所ですから、これから一緒に行ってみますかと云うに、左様ならばというので只今兵營のある所より南にあたる水田地に来り自ら鋤を執た。ここに始めて水田試作の目的だけは達しました。尚この外に札幌村に一ヶ所試みました。これは当時の戸長、稲葉元助氏の所有地を借りた訳です。さて、いよいよ秋になりまして、両所共に稲は無類の上出来、まるで鬼の首でも斬った様な心地が致しました。

併し、ここに一つ面白い話があります。札幌村の水田は勤業課試作場の水田とは隣りあっておりましたが、こちらの上出来なるにも拘わらず、あちらの方は只青々として更に実を結ぶ様な色も見

えないです。所で官員さんや米作に心ある人々が我れ後遅(おくれ)じと見物に来ては、いずれも舌を巻いて感心し、何とこの稲をそのままに持出して繁松にも見せてやってはどうか、と勧めるように言う人もありましたが、そうしては繁松が不首尾になるであろうとそのまま黙っておりましたが、水田は適當する稲の試作は好結果であったそうということが甲より乙に伝って大評判となりました。それかあらぬか繁松は幾程もなく根室に向けて転任になりました。

さて、こうなりますと今迄水田は見込なしとて断念して居た人々もいよいよ水田に心を注ぐ様になったのです。所で高橋亀次郎氏の如きは僅か三年間で数十俵の米を収穫するようになりました。自分は右の水田試作とか地理地景の踏査と云うような事の外には何にも用事がなかったものですから一日地理課の方へ出頭して測量官の件を願い出しました所、当時の課長山田氏も早速承諾して呉れました。

尚舟越氏も引受けて呉れましたので、ここで暫時、地理課に勤むることとなりましたが、或時山田課長が申しますには、お前には何か職業はないかとのことにハイ色々あります、その中で庭作りが好きですと答えました所、それなればと山田氏の世話で滄海楼(?)の庭を作ったのが始まりで水原寅藏氏の庭も造ると云うような次第。その他庭樹を植えることもやりましたが、彼是する中その年も十二月となりました。で、ひと先ず帰国し財産を悉く皆売伐(ばいばつ：うりはらう)なし、東京より隨行の一家族と共に小樽へ着きましたのは翌年(明治11年)六月三日でしたがその時の嬉しさと云うものは今も忘れる事が出来ません。これから前年願ってあった只今の所へ小屋掛をして開墾に取りかかりましたが今でこそこの様に花も咲けば人も観に来て呉れるようなもの、その当時と云うものは実に実にお話になるものになったものではありません。

この辺一面に年数の分からぬ大木の茂り合って居るし樹下は小笹が思うままに茂っている、お負けに熊めがノコノコやって来ると云う次第で余り

心地の良い訳でもありません。

まず、その年に一反半許り開墾致しましてこれに薑（きょう）（生姜のこと）と田芋（里芋の一種）を作りましたが何ということですが、これ丈で三百円（現在の貨幣価値換算で300万円）あげましたよ。二年度には六反開いて三百円余取りあげました。三年目には一町五六反開きましたが同じくその年も三百円余手に入りました。この三年目には藤森銀蔵、同万吉氏、上島助氏の三戸来しました。

とにかく、この年（明治10年）米作り成功したことで、12月には湖南村南真志野へ帰り、全財産売却している。さらに、東京で家族を伴って小樽経由で札幌（札幌村東耕：現在の北8条東8丁目53番地）に入って終の棲家としたのが、明治11年6月であった。

上島の稲田成功の跡を辿ると、以下のようになる。

明治10年に40歳のときやってきて、ある程度水田耕作ができると判断する。そして、明治11年（1年目、41歳）、1反半耕す、300円（300万円程度）の収穫。（この頃の1円は、平成21年10,000円と換算）

明治12年（2年目）に、6反耕し、300余円収穫。

札幌を終の棲家とした明治11年は、上島にとって生涯忘れることのできない感激的な年になったという。上島40歳であった。

こうしてみると、17歳で家を出て、直ちに、町屋に奉公に出て10年間、27歳になって、行商人となり、江戸～大阪間を往復したり、ときどき、途中にある故郷（上諏訪湖南）に寄って（帰って）農・商業や園芸をしたりして過ごす。37歳まで10年間に及ぶ。（1865～1874）。

江戸時代から明治初めにかけて江戸を中心に合計で20年間ほど商売を経験したことに

なる。

ここから、上島には、青少年から壮年に掛けたさまざまな職の経験から、商売気（商才、ビジネス感覚）をもつようになり、道々の見聞や上方文化にも触れ文人感覚も養われたと想像できる。

商業の方が競争者も多くなって、利益が薄くなってきたので、測量士となる。3年間の測量士を経て札幌にやってきた。

時代に翻弄され、波乱に満ちた来し方を振り返ったとき、米作りに成功し、家族を連れ札幌に落ち着いたとき、深い安堵感が上島を襲ったのではないかと。

神に感謝したかもしれない。諏訪神社の御分霊を戴いてきたのもそのあたりの心境をあらわすものであろう。

上島は、国元を去るに当たり、先祖代々の墓守を熊沢亀吉に託している。上島の父幸右衛門は当時普請奉行を勤めていたと考えられ、代々大工であった熊沢家との関係もそこで生じていたのであろう。

熊沢亀吉から3代目猛氏（2代目は直治）は語る。「上島が北海道に渡るに際して、墓守を『同年代で友達付き合いをしていた』大工亀吉に託した」と。

上島家の墓は現在の場所より上にあったが、高速道路ができたので、若干下に降ろされている。昭和49年（1974年）移転時には札幌からも末裔の人たち数人も駆けつけて移転記念式を執り行っている。

(8) なぜ上諏訪から大勢の人々を連れてきたのか

上島には、一つの思いが芽生えたかもしれない。もともと上島は上諏訪の武家の出である。それが維新で没落してしまった。国元の人々の暮らしも楽そうではない。自分も国元の人々も何とか新天地で楽な生活を享受できないか考えたのではないかと。一族の再興を目論む気持ちと同じだったかもしれない。

明治15年(5年目)(45歳)、上諏訪へ赴き、故郷の人々に北海道移住を勧奨する。自身の成功をもとに説得したであろう。

とにかく、上島は、牛山民吉なる人物の開成会社が人員募集しているというに応じて、信州へ赴き旧諏訪から10余名を連れてきたが、東京で牛山に面会すると約束と大いに相違することが分かったので牛山と破約して、札幌で別に1村を作る計画を立て、東京から同行した河西由造等20余名を引き連れて札幌にやってきたことになっている(合計30余名)。

彼らのうち、「当時国許から来た連中は普通移住とは違って少なくとも7,8百円多きは千円以上(600~1,000万円程度)の金子を懐中して居りました、で結局随意に地所を買うことになりました。」とある。(明治16年の1円は、平成21年の9,171円に相当。)

上島は、明治15年に30名程札幌に連れてきている。具体的に誰だったのか。

上島の日記には何人かの名前が登場する。また、その人たちが札幌へ来た後、どこへ向かったかが示されている。例えば、

- * 武井惣造(出身 豊田村)、伊藤庄五郎(一)、武井惣太エ門(一):(以上、3名、札幌村へ)
- * 茅野鶴藏(出身 宮川村):(丘珠村へ)、
- * 伊藤磯八(一):(円山村へ)、
- * 宮坂坂藏(出身 諏訪郡上諏訪村)、濱清吉(一):(以上、2名、琴似村へ)
- * 花岡太吉(出身 諏訪郡湖南村)、金子半藏(中州村)、後町万太(諏訪郡?), 中澤兼三郎(諏訪郡湖南村)、河西由藏(諏訪郡上諏訪村)、小池嘉一郎(宮川村):(以上、6名、月寒、篠路、厚別等へ)

また、日記では、明治15年に連れてきた者のうち、持参金の多かった人は土地を買い、少なかった人は開拓へと散っていったとある。

しかし、それぞれが具体的に誰々であったかまでは記述されていない。

ところで、(明治15年に)上島と一緒に来たのは、実際には30名ほどいたようであるが、上記以外の名前は分かっていない。また、誰が上諏訪から一緒だったか、誰が東京から加わったのかは分からない。

(9) 札幌で成した顕著な業績は何であったか。

一村(上島村)は作れなかったが、ある意味それ以上の業績を残した。札幌の広い範囲に渡って連れて来た人々が散らばり、それぞれの地域を存分に開拓していったからである。

若林 功が昭和13年に書いた『故河西由造小傳』の記述¹⁷⁾。

是(由造が札幌に来た)より先上島と云ふ信州人が明治十一年に札幌に来て東臯園と総する花園を経営してた。東臯の語源は判らぬが、臯月は五月、五月は花菖蒲の月である。それかあらぬか東臯園は花菖蒲の変種の多いのを以て世に知られ、彼も亦之を大に誇りとして変種育成は彼独特の技能として深く秘してた。何んぞ図らんその秘技は札幌農学校の御雇教師たる米國人から雌雄蕊の所在と交配の方法を教へられて修得した応用植物學であつた。彼はこの交配の原理から推理して人間の子を生む秘傳を知つてゐたと世人の噂が高かつた。

上島が米作り以外でやったことは以下の(①~④までに集約できると考えている。

① 東臯園と札幌諏訪神社の創設

札幌歴史資料館の「札幌の歴史を築いた先人達」では、上島が精魂込めた努力により完成した花畑「東臯園」や信濃國一の宮諏訪大社のご分霊を奉祭した札幌諏訪神社を最初に建立した人として紹介されている。

上島 正の精魂込めた努力により完成した[東

阜園]は、当時の札幌市民の憩いの場として大きな役割を果たしましたが、現代風に言えばイベント会場としても利用され、句会、碁会、謡曲などが盛んに行われていたようです。当時、開拓使の構想によると、札幌の東西南北に大規模な公園を作る事として、西には[円山公園]南には[中島公園]北には[偕楽園]そして東には[東阜園]が計画されていました。円山・中島公園は現存していますが、偕楽園、東阜園は、現存していません。この計画が実行されていたならば札幌の町並みも趣を異にしていたかも知れません。

② 「人為交接」と「切り花の水揚げ」の成功

人為交接法

アノ菖蒲の御尋ねですか。アレハ移住の時、東京表で有明なる武蔵屋瀧蔵氏より花菖蒲七拾種を賄い取り、明治十三年に人為的交接を行い、この法で殖やして、五、六百種までにいたし、西洋花菖蒲も矢張り同上の手続きで殖やしましたが、只今貴方が御覧なさるゝ通りです。其の他の植物も、留意、苦心して人為交接を行い随分上種を出しましたが、これらの事が何時しか日本園藝会の知る所となり、明治十六年十二月十四付で、日本園藝会々長、花房義質氏の名前で「本会学藝委員を囑托す」という辞令が参りました。是れは私し身に取しましては、過分の面目と言わなければなりません。

・・・・・・・・・・・・・・・・

人為交換（接）法に就いては、明治二十五年八月、北海道物産共進会がありました。西洋花菖蒲、洋名ではグラジヲロスとやら言うのを出品いたしました。其の時、褒状を賜りました。其の書付けはこれで御座ります。（其の文に曰）

西洋花菖蒲 上 島 正

人為交換法に通行しこれを実地に応用
良種を産す其巧妙見るに足る

切り花の水揚げ

いやもう、これは鼻を高くして自慢するに足る訳にはありませんが、他に鳥渡（ちょっと）聴いて頂きたいことがあるのです。それは「切花の水あげ」の事です。御案内の通り、手前花圃にも花は随分数々ござりますが、其の中で切花として水あげに最も苦心致しましたのは萩です。これは誰しも知って居る通り、切花としては瓶の中でまことに保たないものですが、私は是程のことが工夫できなくてはと、壮季の頃諸国を遍歴しました時分に或る活山師、或る花屋、さる花園などもそれぞれ蒼蠅がらるゝまで問うて見ました。聴いても見ましたが、誰一人として教えてくれる人もありません。其所で私は何とかしてと思ひまして、活花に用いる葉を萩だけでも何十種も揃えて見ましたが、埃だけ（ちっと）も効能がないから、所詮、萩の切り花に水を揚げることは無益じゃと断念しておりました。

所がある日の夕方、子供らが今を盛りの萩を惜気もなく切り採って持ち帰りましたので「痛はしきに」とかう思ひましたから、早朝に切ったものさえ無益だから今頃切ては尚しも益に立つ筈もないとは考えましたけれども、あまり見事なのに免して、花瓶の温水の中へ投げ込み置きました。

スルト翌る朝になりまして、件の萩の花が前夜とすしも色が変わっていない。さては……と考えまして、其の後水を注し、また花を切つて来まして、今度は一旦熱き湯に投じ、其の後水を注し、かふやうて翌る朝見ました所、まことに青々として、花の色も前夜と少しも変わっておりません。コイツしめタトサア大喜び。これがすなわち「萩の花に水揚げ発明」初めてでござりました。

また、天竺牡丹、洋名でグーリヤとか申すようですが、コイツ水揚げが六づかしひ。切り取るや花も葉も直ぐに萎れる。誠に手置きの厄介な花で、切るとき湯に入れ花箱（活花師の用ゆる水揚げ箱）に入れて置いても二時間とは持たないものですが、この発明が偶然でござりました。

或る時、天竺牡丹を切り、熱き湯に入れ、これを花箱に移つさうとした所へ、客来あつてしきり

に私を呼ぶものですから、其の俤にして出迎ひし
まして、大方二十分も経ちましたと思う時に、
天竺牡丹のことを思いだして、これ々々だから
少々御免と急ぎ足に一室へ来て見ました所、妙で
はありませんか。まるで活き々々として圃のある
のと少しも変わりかない。これも大喜びで、以来
天竺牡丹を切りますとすぐに熱湯に投れ、空気
の流通のよき所へ置きまして見ますと、生々と水
が揚がり、随分一週間位わいきいきとして花も発
きます。これがまづ「天竺牡丹水揚げ」のそもそ
もでした。

③ 著書「妊娠自立法」の出版

花菖蒲の交接法に成功し、それが基で日本
園芸会の委員を委嘱されるまでになった。そ
の交接法を人に応用してみるという内容の
「妊娠自立法」という本を、明治28年に出版
した。実際に適応して成功した例が書かれて
いる。

明治二十八年に「妊娠自立法」という小冊を発
行致しましたが、最初は不都合の虞があると言ふ
ので発行を停止されました。其の後、訂正を加へ
まして発行し、現に南二条西四丁目の大畑帳面屋
に売って居りますのがこの本です。この法といふ
のは、年久しく考へたもので、いよいよ確定致し
ましたは、前に申しました植物交接法からです。

若林 功の一文に上島の本の話もでてくる。

是より先上島と云ふ信州人が明治十一年に札幌
に来て東臯園と総する花園を経営してた。東臯の
語源は判らぬが、臯月は五月、五月は花菖蒲の月
である。それかあらぬか東臯園は花菖蒲の変種の
多いのを以て世に知られ、彼も亦之を大に誇りと
して変種育成は彼独特の技能として深く秘してた。
何んぞ図らんその秘技は札幌農学校の御雇教師た
る米國人から雌雄蕊の所在と交配の方法を教へら
れて修得した応用植物學であつた。彼はこの交配
の原理から推理して人間の子を生む秘傳を知つて

ゐたと世人の噂が高かつた。

と書いている。若林自身が、「妊娠自立法」
は読んだかどうかは定かでない。

④ 上島の絵巻物

上島は、開拓使大書記官調所廣丈が述べた
ように、虚舟と号する南画も善くしたとある
(北海道開拓記念館蔵)。南画とは、「デジタ
ル大辞泉」の解説によると、(1)南宗画(なん
しゅうが)の略称、(2)江戸中期以降、南宗画
の影響のもとに独自の様式を追求した新興の
画派の作品。大成者は池大雅と与謝蕪村、と
ある。

(10) 自己の人生の総括はどうか。

上島は、自分の来し方を振り返る。上島の
日記の最後の日(明治三十三年十月二十七日)
には、63歳まで生きてきた自分の総括
を行っている。要約すると、「誰にも仕えな
い楽しみ」となる。

しかし、仙人気取りでいたものが、またもや世
に出てまごまごする様になったからとて、別に悔
やみも致しません。これも矢張り世間並みの事
ですから、まあこふやってしがたい姿でもして居
れば、或る人々の考へでは請らないとか何とか想
うようなこともあるかも知れませんが、私の身に取
りましては王侯や貴人、さては名誉の奴隷にな
り込んで、世に銜(てら)う族達の味わえぬ楽
みがあります。気楽で世を通て行く塩梅はマア
佛家という極楽世界とでも申しましようようか。
私は全く楽天主義でござり櫛。歌にも

上見れば、及ばぬ事の多かりき この年(こ
れ) 着て夢をおのが心す

とやら言うのがござりますが、万事を上を望ま
ず謙(へりくだる)るということに心を用(い)
てご覧なさる通りにこうやって毎日足に草履をは

き手には鋤鉤を取るのです。

しかし、六十過ぎて若かりし昔の事など想い回（めぐ）らしますと「宿昔青雲志」とやという詩もある通り方外な望を起こしたこともありまして今ではかなしいかなツイ胸に浮かびます時には、我が影法子にさえ気恥ずかしき事もございます。また思い返して矢張、今の境界（報いとしての境遇）が勝し（他に勝っていた）てあったのだと考えなほすような次第で、口外もかようなのが浮かびましたよ。勿論ふ味だとは不味（あきらか）がほんの意味だけをご覧なしてくだされ。

極来てこんなものかとおもう成り 花のうてなにまさかおらねぞ

（筆者訳：きわみまで来てこんなものかと思う。花が無ければ何か香るものがあっろうか）

おわりに

改めて「上島 正」の波瀾万丈ともいえる生き様を考えてみる。

現在のわれわれが、かつて北海道を開拓した人たちに描く大半の印象は、艱難辛苦の生活歴であろう。しかしながら、上島には、当時の開拓者の例としてよく挙げられる依田勉三などと違って、悪戦苦闘した開拓者のイメージはほとんど湧いてこない。

彼の日記からは、開拓を楽しみながら実践した様が浮かんでくるから不思議である。

そういう人物としか言いようがない。

今日の札幌の地で高橋亀次郎等とともに始めて成功したと思われる稲作についても苦勞の末という感じはでてこない。田畑を耕し、花卉を愛でる一方で、時に詠い、時に描く（書く）、何とも活動的な人生を送っている。日記の最後に悔いない人生を送って来たという自負も覗いている。こんなことはお釈迦様でも分かるまい、と言っている。

日記でも「気楽で年を経て行く塩梅はマア

佛家でいう極楽世界とでも申しましようような私は全く楽天主義でござりました」という感想を吐露している。

小池陸郎氏も書いている¹⁸⁾。

花の交接法を研究し好結果を得た。すべての花卉にこの方法を応用し悉く好成绩を納めた。十七年、時の開拓使大書記官調所広文同園に來遊して幌都庶民一般の縦覧をすすめた。で、これを東耕園（のちに東阜園に改む）と命名して一般に公開した。又その種子は内地各府県にまで知られ、花菖蒲については遠く米國に輸出するようになった。「シャクヤク」「球根」等はひろく各府県に移出し有名であった。

又、翁の人柄について次のように書き記している。

「翁天資清秀寛容にして百芸に精通す就中虚舟と号して南画を善くす詩文、和歌、俳句の造詣深く亦能書の聞へあり、三十二年、翁が六十二の時、渡道当時より現在に至る迄の開墾辛酸の実状を絵画に写して子孫に伝うるものあり、其筆致健靈犀にして輕妙なり其卷末に

古を忘れぬ種にならはやと 伝へのままをか
きしるすなり 六十二翁

上島自身、(10)に見たように、誰にも仕えなかった気楽さについて書いている。

諏訪市・諏訪市教育委員会編（1985）の『諏訪藩主展』（パンフレット）の「はじめに」の冒頭に以下の記述がある。

諏訪地方には、他に例をみない独特な歴史的風土が存在する。それは今なお、この諏訪の地と人々の中に脈々と息づいているのであるが、歴史を顧みるならば、この風土の形成過程において最も重要な位置を占めるのは、諏訪神社の発展に代表される中世の諏訪と、諏訪藩（高島藩）の成立と繁栄に代表される近世の諏訪であろう。

諏訪の歴史は多くの名もなき私たちの先祖たち

が担ってきたのであるが、歴史書に名を残している人々の活躍も、時の支配者階級の在り方や個人の役割を表わしているばかりでなく、各々の時代性を示すひとつの象徴としても重要である。中世の諏訪では諏訪神社上社大祝として、近世の諏訪では諏訪藩主として、古来一貫してこの地における領主家であったのは、神（みわ）氏（のちの諏訪氏）である。近世における諏訪藩主家十代の居城であった高島城の復興十五周年を記念するこの「諏訪藩主展」は、藩主という時代のひとつの象徴を通して、諏訪の歴史的風土の形成について問い直してみようとするものである。

歴代藩主に直接関係する数々の展示品は、私たちに江戸時代の諏訪をより身近なものをして感じさせてくれる。

として、歴代（1代～10代）諏訪藩主（高島藩主）たちの業績が綿々とつづられている。筆者は、上島にこの観点を被せてみている。

江戸期の幕政改革には、享保の改革、寛政の改革、天保の改革という3大改革がある。いずれも「儉約令」中心の緊縮財政改革である。

大岡越前なども日本初という流通政策（価格政策）を打ったりしている¹⁹⁾。

将軍吉宗の享保期に町奉行であった「大岡忠相（越前守）」は、物価安定のために流通政策に取り組んだ最初の役人とされている。幕府の財政が苦しくなったとき、貨幣を悪鑄・増発したが、物価は騰貴し、財政はさらに悪化していった。幕府は、通貨統一と流通量の収縮を図ったりしたが、このときの相場で儲けたとされる両替屋を、忠相が摘発し、罰している。

以後、忠相は、日本型流通システム、とりわけ問屋から仲買（二次卸と考えてもよい）を経て小売業へと商品が流れる仕組みの成立に、深く関わっている。商人の過剰利潤をなくす、買い漁り競争を防ぐことによって仕入

れ価格の高騰を防ぐというものであり、その後の「物価引き下げ令」へとつながっている。適正利潤は1割5分、価格操作で超過利潤をむさぼった場合は、忠相によって摘発された²⁰⁾。

江戸期では、それに先立つ室町・安土桃山期で栄えた自由競争を押さえつける政策を取り続けたということにはほかならない。とにかく、流通経済を沈滞化させたことは間違いない。

上島としては、特に、幕末期、天保の改革では借金で首の回らなくなった武士を救うべく「借金帳消しの令」を出して札差を混乱に陥れるなどの暴挙に出た。借金帳消しで喜ぶのも情けなく、そんな人間を救わねばならない武家政治にも愛想が尽きたのではないか。

そうした商（ビジネス）を抑えつける政策を取り続けたところへもってきて、幕府が出版物や絵画など芸術関係までも規制するに及んで、人々の楽しみや夢までもなくしていった。

とにかく、上島は、幕末期の混乱の中で、権威を失った武士に見切りをつけた。幕府側（佐幕派）と勤王攘夷派（倒幕派）に分かれて血で血を洗う抗争の姿を見て武家に嫌気がさした。

そうかといって、国元へ帰っても、もともと武家の出身であってみれば状況がもっと悪くなることは必定である。

先がどうなるかも誰も分からない。武士でなければ何でもよいと考える。自活していけることは何か。町人になるしかなかった。一体何をすればよいのかと考えたとき町人だったということではないか。

しかし、あまりにも早い転職の決断である。江戸へ出てから半年で町人になっている。どういう判断があったのか。国元と相談したのか、はたまた、国元の命令だったのか。

いずれにしろ、その後は江戸・大坂間の行商人をやり、さらに測量士になって札幌へ

やってきて開拓者になっている。

考えてみれば、上島のような時代を見通す力、変化の方向性の読みの鋭さ、決断力の早さ、変わり身の早さ、自らの手による新しい世界の開拓をしようとする者にとって、北海道開拓はうってつけの場所であったといえるのかもしれない。

かくして、上島は、札幌に安住の地を見出した。そして、自身の経験に基づいて、上諏訪へ出向き人々を連れてくる。

もっとも、上島には一つの“志”が芽生えていたのかもしれない。一度捨てた故郷・上諏訪である。残された人々もあまり幸せそうでもない。何とか彼らのためにも今一度この地札幌で再興・再挑戦させてやりたい。同郷の人々と新しい一村を作りたいという願いである。その思いが故郷へ走らせたのかもしれない。結局、理解し説得に応じた30名ほどを連れてきた。

結局、一村（上島部落といったような）の夢は果たせなかったが、札幌でそれぞれ散らばった人々がその地で成功を果たした。

いずれにしろ、開拓使大書記官調所廣丈が「百芸に通ず」といったというように、短歌、俳句、南画、専門書を著す。何でもござれのスケールの大きな人物であったことは想像に難くない。かつて武士であったことなどおくびにも出さない。町人になったり、行商したり、常に迷わず前向きにして、積極的行動派、何事にも果敢に挑戦（チャレンジ）する。

事に当たって、細心にして探求心もあるとなると、これはもう完璧ビジネスの世界の人間である。上島（正）こそベンチャー・ビジネスを実践した人であったと言えるのではないか。

明治の時代には新しいタイプの人物が、とりわけビジネスの世界では、渋沢栄一、岩崎弥太郎などの名前が出てくるが、上島はそれらに比肩する要素を持ち合わせている。

とにもかくにも、混沌とした世界にぱっと飛び出したスケールの大きい一人の新人類であったと同時に、北海道におけるビジネス・イノベーションの先駆け人と言えるのではないか。

そうした人物が故郷へ戻って、自身の成功を伝え北海道移住を勧奨した。それを受けた人々が挙って従った様子が当たり前のように目に浮かぶ。

そして、上島の果敢な精神を受け継いで札幌にやってきた連中もまた、開拓者というより今日言うところの「企業家（ベンチャー・ビジネスの実践者）」たちであったと考えてもあながち間違いとはいえないであろう。

注と参考文献

- 1) 札幌歴史資料館（札幌の歴史を築いた先人達）：
(<http://www.justmystage.com/home/moiwa/sapporo-siryokan/lekishibunko/rekisi/index.htm>)
- 2) 『厚別中央——人と歴史——』
- 3) 遠山茂樹（2009）『明治維新』、岩波現代文庫、p.311。
- 4) 上島 正（1900）「想い出の記」（根岸 徹（厚別中央歴史の会会員）校訂）
上島は、63歳の時【明治33年（1900）】に「想い出の記」と題する日記風の読み物を現している。これは、日記調であるが、上島の自伝とも言えるものである。しかも、その筋立ては象牙生という人が上島との問答形式をとりながら進行するという体裁になっている。このようなストーリーにしていること自体、ある意味、風流人としての面目躍如といったものになっている。
- 5) 諏訪市・諏訪市教育委員会編（1985）『第21回諏訪市文化祭・諏訪藩主展パンフレット』、昭和60年11月1～4日。
- 6) 宮澤悦雄（2009）『〈河合曾良参百回忌・曾良顕彰像建立記念〉曾良物語』、正願寺（諏訪市）、小冊子（全55頁）。

上諏訪では、俳人曾良がでている。河合曾良は、慶安2年（1649年）酒造業（屋号銭屋）に生まれる（～宝暦3年（1710年）享年61歳）。上諏訪では、高島藩3代藩主、4代藩主の頃に当たっ

- ている。一般にも俳諧が相当広まっていたと推察される。
- 上島が幼少年期、書画を習ったのもこのあたりに端を発していたのではないかと理解できる。
- 7) 江戸の藩の石高ランキング：<http://homepage1.nifty.com/kitabatake/rekishi3.html>
- 8) 遠山茂樹 (2009) 『明治維新』, 年表。
- 9) 鑄木清方 (2009) 「兎と万年青」『随筆集・明治の東京』, 岩波文庫, pp.49-53。
万年青 (おもと) : ユリ科の多年草, 色が変化する。観賞用として品数が多い。
- 10) 鑄木清方 (2009) 「兎後談」『随筆集・明治の東京』, 岩波文庫, pp.54-59。
- 11) (<http://www4.plala.or.jp/kawa-k/kyoukasyo/3-23.htm>)
- 12) 東海道 53 次距離表：<http://350ml.net/labo/tokaido.html>
- 13) 遠山茂樹 (2009) 『明治維新』, p.228。
地租改正の重要性について詳細に述べている。
- 14) (<http://www.tamagawa.ac.jp/SISETU/kyouken/rice/ishikari/index.html>)
- 15) 西田秀子 (2006) 「屯田兵の稲作願望——“水田同志名簿”(明治 20 年) 顛末——」『札幌の歴史』, 札幌市教育委員会文化資料室, 第 51 号, pp.13-26。
- 16) 中山久蔵：https://www.sapporo-u.ac.jp/univ_guide/president/message_h20en.html
- 17) 若林 功が昭和 13 年に書いた『故河西由造小傳』の記述。
若林 功 (1938) 「農村史・創業の人びとを語る——厚別開拓の父 河西由造——」(故河西由造小傳)『北海道農會報』, 第 38 卷, 第 453 号。
(中島九郎編「河西由造頌徳碑建設に当たって」, (昭和 13 年) ? に収録)。
- 18) 小池睦郎 (1984) (川下開基百年記念実行委員会編『川下百年誌』)。
- 19) 辻 達也 (1993) 『大岡越前守——名奉行の虚像と実像——』, 中公新書, pp.156-163。
- 20) 田島義博 (1990) 『商の春秋』, 日本経済新聞社, pp.47-49。